

平成30年産

気仙沼・南三陸 稲作情報 第2号

平成30年4月27日発行

宮城県気仙沼農業改良普及センター

TEL 0226-25-8069 FAX 0226-22-1606

<http://www.pref.miyagi.jp/soshiki/ks-tihouken-n/kesennumanoukai.html>

【平成30年産稲作のポイント】

食味向上へ向けた重点技術対策 ～平成30年産ひとめぼれも「特A」を目指して～

- ・土づくりの実践による地力向上・持続的な米づくり
- ・生育量に応じた適正な肥培管理の実施～適正な籾数レベルで穂揃期の葉色を維持～
- ・登熟向上に向けた水管理の実施
- ・出穂後の気温等に基づく適期刈取の励行
- ・良食味米の生産に仕上げる乾燥調製の徹底

1 播種の進捗状況

管内の播種盛期は4月15日となり、平年より1日遅くなりました（表1）。

表1 播種状況

| | 始期 | 盛期 | 終期 |
|-----|------|-------|-------|
| 本年 | 4月7日 | 4月15日 | 4月22日 |
| 平年差 | +1 | +1 | +1 |

注）播種の始期，盛期，終期は作付面積比でそれぞれ5%，50%，95%が播種された時期。

2 田植えの準備

（1）畦畔等の補修・畦塗り

漏水を防ぐため、用排水路の補修は必ず行いましょう。畦塗りはほ場の漏水等を防ぐ重要な作業です。降雨の後など適切な土壌水分の状態で行いましょう。

（2）基肥施肥

基肥の目的は、初期生育の促進による有効穂数の安定確保です。適正な基肥窒素は、稲の活力を高めて施肥窒素の利用率を向上させるとともに、地力窒素の吸収量も増加させます。

施肥設計にあたっては、下記の基肥施用のチェックポイントや慣行の窒素施肥量を再確認し、適正な生育量・籾数を確保するようにしましょう（表2，表3）。

<基肥施用のチェックポイント>

- 1 基肥窒素量の減肥を考慮する必要がある水田
 - 6～7月の生育が過剰である
 - m²当たり穂数が600本を上回る（ひとめぼれ，ササニシキ）
 - 毎年倒伏する
- 2 慣行施肥窒素量のままで対応できる水田
 - m²当たり穂数が400～500本程度である（ひとめぼれ，ササニシキ）
- 3 基肥窒素量の増肥を考慮する必要がある水田
 - 6～7月の茎数が少なく，m²当たり穂数が400本を下回る（ひとめぼれ，ササニシキ）

表2 品種特性に応じた基肥量の目安

（成分量 kg/10a）

| 品種等 土壤型 | a 標準的施用量の品種 ひとめぼれ，まなむすめ | | | b やや減肥の必要な品種 ヒメノモチ | | | c 減肥の必要な品種 ササニシキ，みやこがねもち | | |
|------------|----------------------------|------|------|-----------------------|------|------|-----------------------------|------|------|
| | 窒素 | リン酸 | カリ | 窒素 | リン酸 | カリ | 窒素 | リン酸 | カリ |
| 多湿黒ボク土 | 3～5 | 8～10 | 8～10 | 3～4 | 8～10 | 8～10 | 2～4 | 8～10 | 8～10 |
| 灰色低地土 | 4～6 | 7～8 | 7～8 | 4～5 | 7～8 | 7～8 | 3～5 | 7～8 | 7～8 |
| グライ土 | 3～5 | 7～8 | 7～8 | 3～4 | 7～8 | 7～8 | 2～4 | 7～8 | 7～8 |
| 泥炭・黒泥土 | 3～5 | 8～10 | 8～10 | 3～4 | 8～10 | 8～10 | 2～4 | 8～10 | 8～10 |

表3 ひとめぼれ目標収量550kg/10a(1.9mm以上)の期待収量構成要素

| 穂数 (本/m ²) | 1穂粒数 (粒) | m ² 当たり粒数 (粒) | 登熟歩合 (%) | 千粒重 (g) |
|---------------------------|-------------|-----------------------------|-------------|------------|
| 480~500 | 57~62 | 28,000~30,000 | 85~90 | 22.0~22.5 |

(3) 深耕と代かき

深耕は水稻の根域を拡大し、根の活力を後半まで維持し気象変動への抵抗力を高めます。代かき作業は丁寧に行いましょう。荒代かきは水を土壌になじませるように、植代かきは浅水で適切な作業速度で行いましょう。

3 田植え

(1) 適期田植え

早植えや遅植えは避け、適期に田植えを行いましょう。気仙沼・南三陸地域での田植適期は5月10日~20日頃です。5月連休頃の田植えは出穂期が7月末から8月始めになることが多く、7月中下旬の低温による障害不稔や8月の高温による玄米の品質低下が発生しやすくなります。

活着や初期生育を良好にするため、田植えは温暖な日に行いましょう。植傷みや浮き苗が発生するので、強雨下での田植えは避けましょう。やむを得ず、悪条件下で田植えをする場合は、田植え後の深水管理等で苗を保護しましょう。

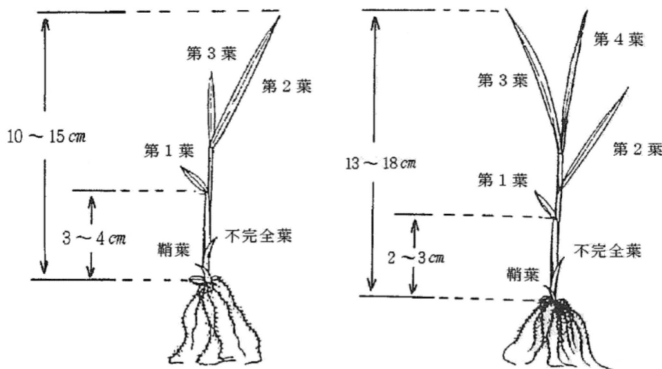


図1 田植え適期の苗
左：稚苗 右：中苗

(2) 植付深・植付本数

適切な植付深は3cm程度です。浅植は過剰な分けつを促進し、苗質や土壌によっては除草剤の薬害が発生する場合があります。

植付本数は稚苗で4~5本/株、中苗で3~4本/株を目標としましょう。

(3) 田植え後の水管理

田植えから活着期に当たる5月上~中旬の気温は、初期生育の良否を左右し、その後の生育量にも影響します。

田植え直後の苗は根からの吸水が少なく、茎葉からの蒸散が多くなります。特に、強風の日などは、葉身の萎凋を防ぐため、葉先が2~3cm出る程度のやや深水としましょう。活着後、低温や晩霜のある場合は、水深5~6cm程度の深水、それ以外は水深2~3cm程度の浅水として、水温・地温の上昇をはかり、初期生育量の確保に努めましょう(図2)。

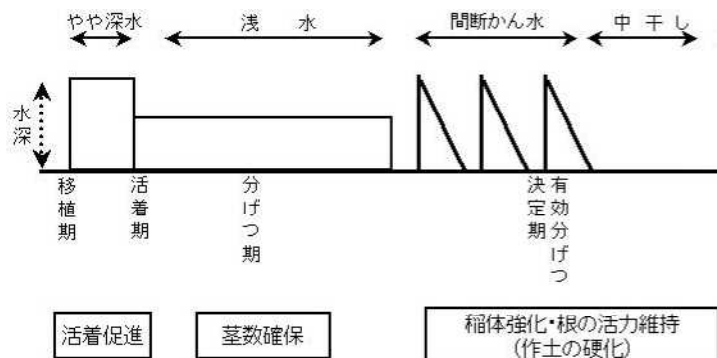


図2 水田水管理体系(慣行)
移植期から中干しまで

3 除草剤散布

除草剤の効果をもつた高めるために、次の点に注意しましょう。

(1) 適正な薬剤の選定

前年に多く発生した雑草や、毎年発生が見られる雑草の種類を確認しましょう。前年、残草が見られたほ場では、初期除草剤と初中期一発剤を組み合わせた「体系除草」を行います。

除草剤は発生する雑草の種類によって、効果が異なります。発生または残草した雑草に効果のある除草剤の選定等、不明な点については、当普及センターまでお問い合わせください。

(2) ほ場の均平

ほ場内に高低差があると、高い部分は田面が露出しやすくなり、そのような部分は除草剤の有効成分が定着しにくいため、雑草が残りやすくなります。代かきはていねいに行い、高低差をなくすような作業を心がけましょう。

(3) 適期使用

除草剤は適期に散布しましょう。ノビエなどの雑草の葉齢を確認し（図3）、遅れずに散布しましょう。散布する時期の目安となる葉齢は、ほ場内で最も生育の進んだ個体の葉齢になりますので注意しましょう。

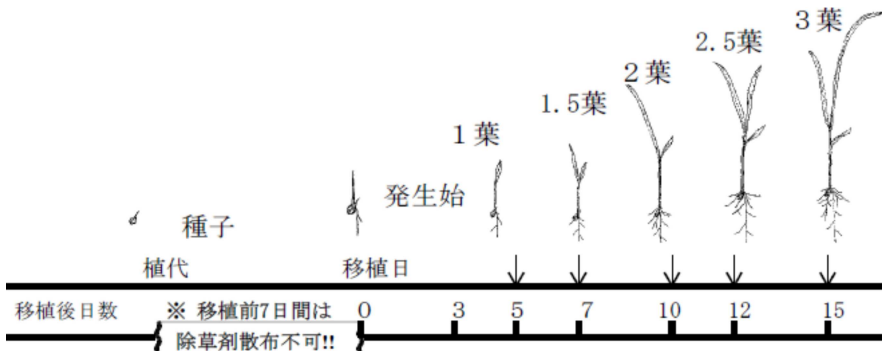


図3 宮城県における水稲移植後のノビエ発生葉数の目安

注) 5月中旬移植、植代～移植が4日程度の場合であり、植代～移植の日数が伸びれば葉数が早まることに注意する。

(4) 水管理

水稲用除草剤の多くは、湛水状態で有効成分が拡散し、田面に定着することで除草効果を発揮します。散布時には、散布後3～4日間は田面が露出しない深さまで入水し、散布後7日間は落水・かけ流しはしないでください。田面水が減少した場合は、静かに補充し、継ぎ水を行います。

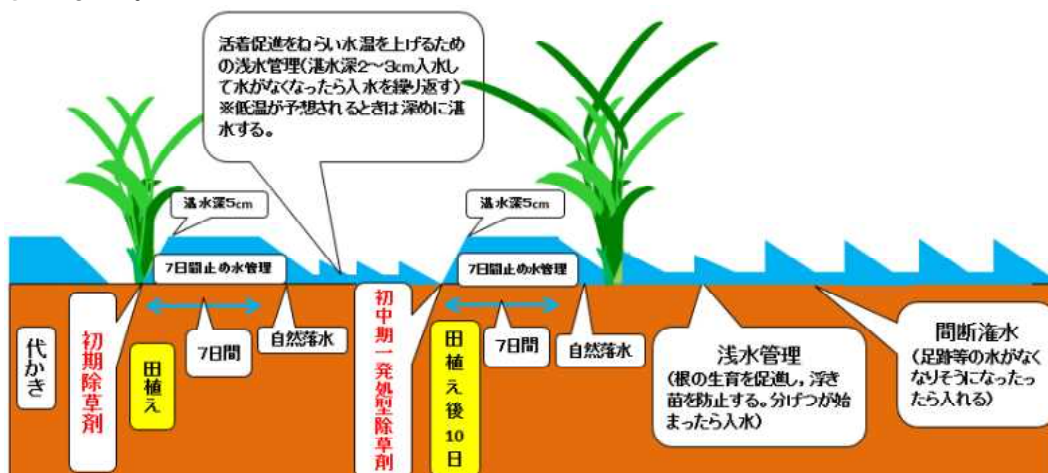


図4 初期除草剤＋初中期一発処理除草剤の体系による水管理

(5) 補植

除草剤散布後は、ほ場に入ると除草剤処理層の破壊になってしまい、補植株の薬害も発生しやすくなりますので、補植はできる限りしないようにしましょう。

残苗はいもち病の重大な発生源となります。ほ場に放置せず早めに処分しましょう。

『4月1日～6月30日は春の農作業安全確認運動実施期間です。
スローガン「まずはワンチェック、ワンアクションで農作業安全」』